

《教育講演》

教1. シンチグラム診断の医師間変動

松 本 徹

(放射線医学総合研究所・高度診断機能研究ステーション)

適切な治療方針を下すには正確な診断が必須である。近年、各種モダリティによる医用画像診断の発展はめざましいものがある。しかし、最近、「診断する」ことに対して世の中の評価は変わってきている。それは診断により利益が得られる一方で、診断することの手間・ひま・費用が、高価な医療技術の採用により、著しくかさんできたことであり、また、診断によるリスク等も考慮されるようになったためである。したがって、画像診断の精度(有効度)を評価することは患者にとっても国の方針面からも必要不可欠な課題である。

核医学技術の発展は第一に、新しいイメージ装置および新しい放射性薬剤の開発、第二にその適切な応用技術の確立にあり、現在はもちろんこれからも流動的に進展していくものと予想される。そのような状況下で、われわれ医療関係者は自分の行っている診断行為の質を常に向上させる義務があるが、そのためには、新しい診断技術の誕生から医療現場への定着、代替可能な新技術の登場による競合というサイクルのあらゆる段階で画像診断の評価を不斷に行っていくことが要請される。

われわれは、これまで核医学技術の有効度を客観的、定量的に評価する研究に長年にわたり取り組んできた。すなわち、昭和50年初頭より人々と開発されてきた一連の核医学画像診断法に対して、日本アイソトープ協会医学・薬学部会エフィカ

シー委員会(飯尾正宏会長・町田喜久雄副会長)および川越研究会(町田会長)等の活動を通じて、多くの施設と共同して系統的、組織的に核医学画像の評価研究を実施し、核医学画像技術の改良や読影診断法の確立に資するデータを得た。また、臨床的有効度を測るのに必要な評価法についてもわれわれのこれまでの研究から多少の蓄積がある。

そこで、本教育講演ではまず、これらの資産を基に、新しい核医学技術から得られる情報がどの程度診断に寄与できるか、従来のものと比較してどんな利点があり、置き換える可能かどうか、相補的なものか否か、診断基準をいかにとるべきなどを定量的、客観的に明らかにするための評価に際して経験した問題点を考察する。

次に、画像診断には画像技術と医師の診断技術の二つの因子が絡んでおり、画像診断機器がいかに進歩したとしても最終的には、得られる正診率は医師の読影能力に依存することに着目し、医師個人個人の読影能とその個人差(診断の医師間変動)を評価することの重要性に言及しその実例を示す。

また、人間工学的見地より、医師の読影診断に伴う行動を計量化し、医師自身説明できない画像診断のプロセスに関連した基礎的検討結果を示す。

最後に、核医学画像技術および医師の読影診断技術の精度管理システムを構築することの必要性に触れ、その具体策を提案したい。